The 36th Annual Meeting of the Japan Society for Respiratory Care and Rehabilitation
第36回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会

ランチョンセミナー9

Luncheon Seminar 9

日時 2026年 11月28日(土) 12:00～12:50

会場 E会場 パシフィコ横浜
会議センター 3F「315」
〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい1-1-1

間質性肺疾患に対する HOT/HFNC

座長 小松　茂 先生
神奈川県立循環器呼吸器病センター
呼吸器内科部長／リハビリテーション科長

演者 片岡 健介 先生
公立陶生病院
呼吸器・アレルギー疾患内科部長

本セミナーは整理券制ではありません
直接会場にお越しいただき、先着順にご入場いただきます。
なお、お弁当数・席数には限りがありますので予めご了承ください。

共催：第36回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会
フクダ電子株式会社

ランチョンセミナー9

間質性肺疾患に対するHOT/HFNC

片岡 健介

公立陶生病院 呼吸器・アレルギー疾患内科部長

今回のセミナーは、間質性肺疾患（ILD）患者の在宅酸素療法（HOT）を取り上げる。近年、HOTの新規導入例はCOPDを上回ってILDの割合が増加傾向となっている。

ILDに対するHOTのマネージメントを議論する上で、ILDの多種多様な病型を認識し、把握することが必要になる。この領域の2026年のトピックスとして、「進行性肺線維症（PPF）」の概念が提唱されており、診断の要点をシンプルに紹介する。ILDの中で最多を占める特発性肺線維症（IPF）もしくはPPFは、慢性進行性の経過をたどり、進行期においてHOT導入となることが多い。ILDに対するHOTのエビデンスは限られており、実際の導入は現場の判断に委ねられている。では日本の現状はどうなっているのか、2023年報告の専門施設データでは、HOT導入となったIPFの中央生存期間は537日であった。さらに予後に関わる因子を念頭に置き、アドバンスケアプランニングにつなげる取り組みを意識するとよいだろう。

ILDの酸素流量は、とくに労作時に高流量を要する場合が多い。場面に応じた酸素供給デバイスを選択することになるため、患者を指導するスタッフには臨機応変に対応可能な知識が必要である。また、十分な酸素吸入下であっても、運動負荷に耐えられない患者に対して、高流量酸素カニュラ（HFNC）による酸素療法が有効な場合がある。ILDのHFNC下の運動負荷について自験の有効例や、複数の報告を紹介する。

ILDのHOTについて、エビデンスと実臨床の両面から議論したい。

共催：第36回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会
フクダ電子株式会社